

保護者の役割(大学編)



女子栄養大学
染谷 忠彦 常任理事
学園政策、運営担当

連載 第4回 「保護者」

少子化や厳しい就職事情も影響してか、「大学に入れば一人前から」大学を出て社会に出るまでが親の責任」へ、保護者の意識は変わっている。大学受験という人生の分岐点に立った子どもに「自分で考え、結論を出し行動させる」ことは、今後の子ども的人生にとって、大きな財産になるはずなのに、保護者が介入する場面が多い。大学選びから願書の入

手、記入、提出まで、すべて親がしてしまう。合格手続も親が済ませ、入学式には家族で出席する。揚げ句の果ては、入学後のガイダンスにまで付いてくる。履修届の書き方、科目の選び方、サークル活動、アルバイトにいたるまで親が質問する。ひどい場合は、子どもが病欠でレポート提出ができなかったら、親が大学に電話し、「FAXを受け取って教員に渡してほしい」と要求する。「学生本人にやらせてください」と頼んでも、「高い学費をお支払いしているのに」と言って電話を切る始末。

子どもが大学に入ったときの親の役割は、まずオーナーとしての①経済的支援である。納入金はどう工面したかを子どもに伝えると、多くはその大金の意味がわかり、学業にも励むようになる。次に②健康支援。生活のリズムは大切。食事を子どもに作り、昼と夜の生活を守らせる。そして③就職支援。各大学が企業を招き就職フェアを開催しているが、最近、親が出てきて困るといった事情を聞いた。過干渉な親の子どもは、人事のプロが見ればすぐわかるという。親の会社のことを話した方が、子どもにとっては有益だと、大手大学の就職部長が話していた。

文武両道、自分で考え自分で判断して行動できる人材を社会は求める。そのためにも、親は後方支援に徹すること。それが、子どもを大きく成長させるのだ。